

久保泊石幢考

橋 迫 照

(会員・佐伯市鶴岡町)

津久見市四浦久保泊にある地蔵には、『豊後州白杵庄津久見村、久保泊浦』と銘文が見えることから、この石幢が造立された時代には、津久見は白杵庄に含まれていたと考えられている。また、石幢の形態や銘文の書き方から、室町時代のものだと推定されると案内板に書いてあるので、恐らく造立当時白杵領であったことが分かる。

石幢の所在地は津久見市大字四浦字久保泊、地元では『お地藏さま』と呼び大切に信仰されている。古くはイボ取り地蔵として、上浦町あたりまでも広く信仰されていたらしい。一週間蛸を食さずと願をかけ、治ると『お接待』をするという風習があり、私達が子供の頃は、麦の取り入れが済んだ家々から順番にコガシ(麦を炒って粉にしたもの)を作り『お地藏さま』の前にお供えして、それを人々に『お接待』として配っていた。今ではコガシを配る家などなく、何かと言えばお菓子や缶ジュース

等を配るらしい。

また、毎年八月二十三日の夜は地藏盆で、十四日の先祖供養と二晩踊りが行われ、十四、五日は近隣の集落の踊りと重複するが、二十三夜の地藏盆は我が久保泊地区だけなので、昔から随分盛況であったと記憶している。翌二十四日には、『お地藏さま』の前で施餓鬼法要が営まれる。施主は昔より久保泊にあった幸網という網方が主催して行っていたが、それは多分大漁祈願や魚鱗供養を兼ねての催し事であったと思う。

現在は幸網はなく、新しく出来た出口網という網方が受け継ぎ、施主をつとめている。導師は昔から四浦落の浦の本教寺(浄土宗西山派)が勤めている。余談になるが久保泊には、現在三十七、八戸の住家がある。以前は五十戸余ほどあり、うち十五戸余りが、四浦鳩浦の立法寺(浄土真宗大谷派)の門徒で、残りが本教寺の門徒であった。

この『お地藏さま』の側にみかげ石でできた五輪塔があり、その地輪の正面に『三界万霊』、側面に『光明山正阿』と、本教寺の山号及び住職の法号が刻まれているのが、かすかに判読できるので、本教寺の管理下にあっ

たと考えている。

場所は昔上浦町の長田から、峠を越えて久保泊の集落に入る道脇(現在は廃道に等しいが)、高瀬家の前にコンクリート製の玉垣で囲まれた、五、四方位の土地に祀られている。案内板に記された文面は写真の通りである。



石幢の銘文に年号はないが、その中の『守庚申』の文字に注目したい。所謂庚申塔の一種と考えられるからである。石幢を庚申塔として信仰する例は、県内でも何例も見られる。それは宇佐市大楽寺の天正二年(一五七四)

銘の塔などがそれである。

庚申塔は江戸時代に入って急増した。県内至る所に造立され、津久見市内でも約六十基が確認されている。しかし、中世のものは現在のところ県内では、永禄三年(二五六〇)銘の別府市白池地獄のものを最古に八基ある。この久保泊石幢も様式から見て、室町時代のもので、中世の庚申塔の一例に加えることができると思う。

案内板に記された銘文は、津久見市教育委員会が昭和五十三年九月二十九日、本教寺と、久保泊区長他の立ち会いのもとに調べたものであるという。ただ、囲いの板石を外しての調査ではなかったと、本教寺の住職は話してくれたが、狭い場所での作業による判読なので、見落としなどなかったらどうかと疑問も残る。このことについては、高瀬家の先代が生前私に、大学の先生が来て調べたことがある。と話してくれたのを覚えている。当時私は全く興味も無かったので、ただ漫然と聞き流していた。先日津久見市社会教育課の担当者に問い合わせたが、どういった調査をしたのか、また、何と言う人が来られての調査かも、説明してもらえなかった。

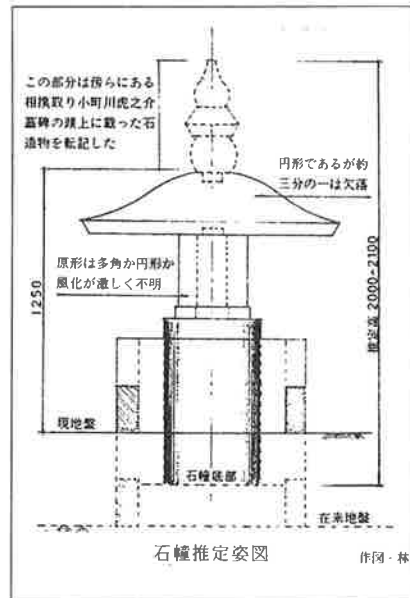
なお、板石を全部取り外しての調査ではなかったとす

れば、恐らくこの銘文の左下に、年号、施主名が刻字されているような気がしてならない。まして外から見える銘文の字格や刻字の形態から見ても、年号、施主名が無いとは考え難い。下部も土砂に埋もれていれば、風化もさほど進んではないのではあるまいか。そこでこの『お地藏さま』の造立された年代について、あらゆる角度から検討してみたい。

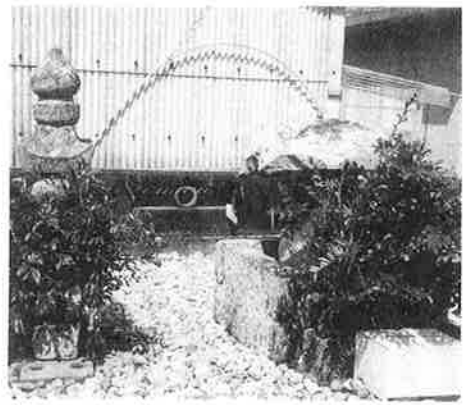
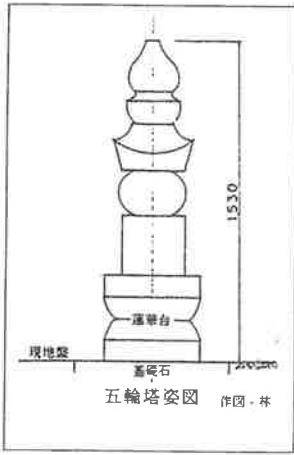
(1) 石幢本体は上から宝珠をなくし、笠も半分近く欠け落ちたものをアミダに冠っている。そして龕部は材質が違うのかと思われるほど、著しく風化していて、それが六地藏かどうかは判明しない。中台を失い、直接円柱形の幢身の上に乗っている。古老の話によれば、昔は現在の位置より三、四十^{トビ}ほど川上の路傍に立っていたが、洪水のために流されたのを拾い上げて、現在の場所に祀ったという言い伝えがあるそうだから、その時中台や宝珠をなくし、笠を破損したのかも知れない。中台を置いたであろうと思われる幢身の上端は、軸方向に外側から五^{センチ}高さで五^{センチ}の凸部になっており、多分ここに中台の下部がはまっていたと思う。



石 幢
(右側面)



(2) 幢身は上部から約九〇センチ位の所までは確認できるが、基礎と思われる部分は見えない。というのは外径で八〇センチ×九〇センチ、内径で六〇センチ×七〇センチ、高さ四五センチの板石の囲いがあり、確認できるものでも二段に積まれているが(阿蘇凝灰岩の凸型の板石を交互に組んでいる)、幢身との隙間が少なく、底までの確認を妨げている。また、敷地内は外側の地面より約五〇センチ程高くなっている。これは私達が若い頃、毎年集落中にある全部の井戸を、七日盆の当日大掃除をしていた。その時井戸の中の玉砂利を新しい石と交換するため、舟で無人の浜から運んで来て、その都度『お地藏さま』の敷地内にも敷いていたが、それは昔からの伝統行事として行われていた(現在は井



五 輪 塔

戸も昔のように使用されなくなり、井戸替えの行事も絶えている)。それが積もり積もって、地表から五〇センチ位の高さになっている。そのため幢身の基礎部分は確認することができない。

(一) 石幢の横に立つ五輪塔の地輪の側面に、刻字されている文字『光明山、正阿』とは、本教寺の山号で、佐伯藩の記録『御領分中寺社記』にも、高明山と書いてあることから、光明山と誤って書いたのかも知れない。また、

正阿というのは住職の法号らしい。言い伝えによれば、当集落に伝染病が流行り、小児の多くが死亡したことがあった。そこでこの塔を『お地藏さま』の脇に立てて、病気で亡くなった子供を供養し、病氣退散を祈ったという。したがって、この塔を造立した時、すでに『お地藏さま』はこの地に祀られていたことになる。

ちなみに本教寺の開山は、『御領分中寺社記』によれば寛永元年（一六二四）、高政公御代白杵大橋寺の一代鏡空曆道上人、開基にて御座候、凡開基より当年迄百十九年、曆道上人より拙僧迄五世に罷成申候、浄土宗白杵大橋寺末山西山流本教寺洞獄とあり、豊後国志卷の五には、本教寺在穂門郷落野浦、寛永元年、白杵大橋寺鏡譽和尚創焉。となつてゐる。

(二) 本教寺の境内には、歴代の住職の名前を刻字した石碑があるが、その中に正阿と法号のある人はいない。阿の字の付く法号の人は、現住職の義阿と十四代の心阿のみである。ただ、八代環空^{カシノクワイシユウ}蕙州上人高転和尚の法号が、正阿弥陀仏と推定できるので、この人の代に立てられたものかも知れない。阿の字の付く法号は、一般の人が死後寺からもらう戒名と同じで、本山からもらうもので正式

には名乗らないのかも知れない。

(三) 文久三年（一八六三）九月、村から藩庁へ差し出した『豊後国海部郡落野浦村明細帳』の控えがある。今も落の浦の新納惣八氏宅に保存されていると思われるが、大分県史料にも載っている。これによると、各浦の集落に残る神社仏閣から、小さな祠に至るまでも克明に記されている。しかし、久保泊石幢の記載はない。このことは当時現在の場所に祀られていなかったではないか。なお、明細帳に書き残された社や祠の場所は、今探し出すにはかなりの努力を必要とする。

(四) 『お地藏さま』の銘文中豊後白杵庄とあるのが疑問である。大分県地名事典によれば、久保泊浦は近世江戸期の村名であるとし、豊後国海部郡佐伯荘のうち、津久見湾に面する四浦半島の北岸に位置する。慶長六年から佐伯藩領上浦村に所屬(仮名付帳)となつてゐる。明治初期の資料によると、四浦の字に久保泊が見えることから、その頃四浦に含まれたものと思われる(大分県各町村字小名取調べ書)。現在は津久見市大字四浦のうちである。(五) 久保泊が中世に白杵庄に編入されていた事実はないが、文祿二年（一五九三）大友義統が改易となり、太閤蔵入地

となった豊後に、山口玄蕃頭宗永と、宮部善祥坊(法印) 継潤が派遣されて検地(文禄検地)が実施され、海部郡四万四千八百石には、代官が置かれていたが、うち二万八千石を垣見(寛)氏が、残る一万六千八百石を宮部氏が支配したと推定される。

その地域は、弥生町の床木を含む津久見以北を垣見氏、以南は宮部氏であったとも推定されるが定かではない。翌文禄三年に、代官の配置替えがあり、白杵城には垣見氏に替わって福原直高(石田三成の妹婿)が入城した。禄高は五万石(大分の歴史)とも六万石(大分市史)ともいわれている。

慶長二年(一五九七)直高は府内城主に転じ、替わって大野郡の代官であった太田一吉が、朝鮮役の功により大名として入城した。禄高は六万五千石(廢絶録)とも三万石(徳川加除封録)ともいわれるが、これまた定かではない。

なお、垣見氏の支配範囲については不明な部分が多いが、海部郡中北部地域であった可能性が強い。床木に残る『河野家由緒記』には、太田一吉が行った検地のようすが記されているのも、一つの根拠となる。一方、以南

の海部郡(宮部氏支配地)は、太田一吉の預かり地として受け継がれていたものと思うが、これを証明できる史料はなく、別の代官支配によったものかとも考えられる。

慶長五年(一六〇〇)九月、関が原の合戦で東軍に呼応した岡藩の中川秀成は、白杵城を攻略して十月朔日の朝町をことごとく焼き払う(中川史料集)という激戦の末、太田一吉は白杵城を退去し太田時代は終った。

(六)慶長五年(一六〇〇)白杵には稲葉氏、同六年(一六〇一)佐伯に毛利氏が入城したが、それまでの間久保伯は白杵の領内であったので、白杵庄津久見村となったのかも知れない。

そうするとこの『お地蔵さま』の造立年代は、文禄二年(一五九三)から慶長五、六年(一六〇一、一〇)までの八年の間ということになる。

佐伯史談会の宮下氏は「佐伯史談」第百六十九号で、「中世佐伯荘の境界に関する研究について」の中で、庚申塔の由来や信仰については、日本石仏事典に詳しく掲載されているので、造立年代のみに限ってみると、大分県内の庚申塔では天正六年(一五七八)銘の造立が最も古く、数も僅かに六基という。津久見市の庚申塔もこれ等

の年代を基準にして考えれば、天正以降の造立と推定されるとしてあり、多分そうであろうと思う。ただ、県内で一番古い庚申塔は、別府市鉄輪白池地獄の永禄十一年（一五六六）銘の塔で、県指定有形文化財であるが、福岡か佐賀からの流入品なのでこれを除外しても、天正二年（一五七四）銘の宇佐市大楽寺の塔や、天正四年（一五七六）銘の佐伯市堅田西野の塔があり、どの塔を指しているのか分からない。

津久見市社会教育課の担当者は、私にこの塔は逆修と言つて、生きている人が先の世の安楽を祈願して、生前に立てたものらしいと説明したが、これは当を得ていない。『庚申塔』の文字があるのは、庚申信仰の結果その供養のために建てたものである。

庚申信仰についての詳細は後述するが、大分県内で庚申に銘文がある最古の石幢は、前記白池地獄の六地藏幢で、竿（幢身）に次の銘文がある。

□時永禄十一年白辰辰仲陽

キリーク（梵字  弥陀）

□庚申各々一結集敬白

（□は于か、へ一五六八、仲陽は二月）

高さは基礎石を含め現高二五〇センチ。

宇佐市南宇佐大楽寺の六地藏幢。銘文は竿（幢身）にあり。

于時天正二年申戌 敬

イ為庚申供養 結衆九人□

二月時正念九日 白

（一五七四）、イは梵字  地藏、□は等か）

基壇から笠まで六角形の地藏幢である。別物の宝珠を除き一六三センチである。

次に久保泊地藏幢によく似た円形の幢身を持つ石幢を、『大分の石造美術』より紹介すると、

(1)三重町下赤峰地藏堂 六地藏幢。

（永正十年銘）

『大日本国豊後州三重郷上村赤峰内居住

三宝弟子亦各々欽奉建立道能化地藏

菩薩廿二王子等右趣者是諸衆生聞是法

已現世安穩後生善所為逆修各々謹言』

大願主徳岩融富知藏禪師

大工小坂仲苑六郎三郎

芳永正竜集癸酉十一月十四日逆修各々敬白

へ一五二三、年時は千文による

銘文にある六地藏、二王子という配列は、石幢の龕部によく見る例で特別な信仰があったものと考えられる。

癸酉は永正十年に当たるとする。凝灰岩製二二九センチ、



(2)三重町上鷲谷
ワケ 六地藏幢。

永正十四年銘

へ一五二七

笠裏に二重の垂木を彫り出した優秀かつ完全な

石幢であるが、人家もない山の中で案内者がないと探し

難い。

(3)三重町上田原

大師堂 六地藏

幢。

天文五年へ一

五六三銘。

竿に戦死者の

供養の銘文あり。

『天文五白三月吉日、衆口敬白』

軽薄なすつきりとしたもので、龕部以外はすべて円形である。凝灰岩製で高さは二四五センチ。



(4)野津町東谷細

枝阿弥陀堂 六

地藏幢。

元龜三年へ一

五七二銘。

竿に一行左の

銘文がある。

『元龜三年壬申卯月五日本願□□坊 大僧都□清』

丸型で龕部八角、二王と六地藏を彫つてある。宝珠を

失い、現高二九五センチ、笠の上に頂いているものは別物で

ある。

(5)この他にも三重町上田原には、明應三年へ一四九四

三月十六日銘の六地藏幢がある。笠の軒が厚く、重い

感じの円形幢である。高さは二〇〇センチ。

それぞれの写真でも分かるように、幢身のすぐ上に龕

部の台として中台があるのが普通であり、久保泊の石幢





飛の慈雲庵の六地藏がある。この慈雲庵には二基の石幢があり、そのうちの一基丸型の石幢の竿には、三行の銘文がある。

『大日本国』『□□』『智鏡』の文字が見られ、龕部も丸型であるが、八区に分けて六地藏と閻魔並びに司祭を彫つてある。この写真で見ると、実に久保泊の石幢と良く似ている。笠の縁の丸み等がそっくりである。

昭和五十三年九月二十九日に、津久見市教育委員会が実施した調査に携わった大学の先生は、当時別府大学の教授渡辺澄夫先生であったことが分かった。そこで『豊後国莊園公領史料集成六(別府大学史料叢書第一期刊行別府大学付属図書館)渡辺澄夫編』を見ると、

が中台を失つて
いることを理解
できると思う。

なお、久保泊

石幢に良く似た
笠を持つ石幢に、
(6)三重町秋葉羽

白杵莊津久見村久保泊浦庚申碑銘

久保泊庚申碑拓影

津久見市大字四浦久保泊

室町時代ノモノナラン、三行目文字ラシキモノアルモ判読シ得ズ、拓本ハ編者調査、「津久見市史ニモ揚グルモ、一部ノミヲ録ス。文学博士渡辺澄夫と書いてある。

このように県内に残る八基の庚申塔の銘文に、結集された名前には僧侶や武士階級並びに豪農層が多く、一般の農民と思われる名前が出てくるのは、江戸時代も中期を過ぎた頃という。

また、江戸時代以降の講の組織も、漁村では網元や大百姓達だけで、貧乏人は参加しないとか、座元になつても米が出せない家は参加しないとか、所によつては、農民階級の中でも庚申講に参加できない人達も多かった。そこで替わりに多くの塔が造立された。一方、庚申講などを組織したのは知識人か、財力的にも裕福な人達だったと考えられる。

中世の頃、我が久保泊の集落にこの塔を造立して、祭祀を行うほどの者がいたのは確かであるが、その講の組織を指導した知識人は誰であろうか。昭和五十三年九月

に調査の際、渡辺博士は三行目にも文字らしきものはあるものの、判読出来なかったとしているが、この三行目に謎が隠されていると思う。誰が何時、何を祈って造立したのであろうか！。

前述の調査に立ち会った人の話では、困いの石杵は取り外さなかったとか。

その理由は何が出てくるかと、恐ろしくて反対する人があり、ただ石杵の外からの判読だけで終わったとのことである。

現在の人達は、この古跡遺物の発掘解明に対して、頑迷な人はいないと確信している。

白杵史談第七十三号(昭和五十七年十一月発行)に、『臼杵市の石幢』と題して、吉井正和氏が一文を載せているが、地藏信仰の謂れや、石幢について非常に詳しく調べてあり、良い勉強になった。

また、別府市の小泊立矢氏が、『県内に於ける中世の庚申信仰』と題して、詳細な研究をされているが、その説によれば、庚申信仰は、『縁起』によると、江戸時代には神道系のもものも出てくるが、以前はほとんどが仏教系であり、その供養のため地藏や十王信仰と混合し、そ

れらの供養を兼ねていたとのことである。

先日、佐伯史談会の会員でもある青江の酒井氏が、津久見史談会を発足させ会長に就任したと聞きましたが、機会があればこの久保泊石幢の調査を期待している次第です。

参考図書 大分の石造美術 木耳社 ほか

